

人生まだ七十の坂
小島直記

新潮社

人生まだ七十の坂

小島直記

新潮社

じんせい
ななじゅう
人生まだ七十の坂
さか

平成二年四月十五日印刷

平成二年四月二十日発行

著者 小島直記

發行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(266)五一一一(業務)

東京(266)五四一(編集)
振替東京四、八〇八 千一六二

印刷 錦明印刷株式会社
製本 株式會社大進堂



乱丁・落丁本は、一面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Naoki Kojima 1990, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-308115-5 C0095

目

次

Bコースを歩いた！

7

横山院長の言葉 13

七十の坂 19

「死計」を考えた 29

怒りっぽい男です 47

七十代の願望 57

長さと中身 71

遺言のこと 91

非行老年 127

余熱と清忙 137

何を捨てるか？ 161

老いのシナリオ 203

装画・斎藤和雄

人生まだ七十の坂

Bコースを歩いた！

今（一九八九年）から五年前、六十五歳の十月末に逗子からこの山の家に移ってきました。愛鷹山麓、標高三百メートル。周囲にあまり家もなく、淋しすぎて住むのはこわい。家内がいうので、三男夫婦に同居してもらうことにしました。

三男坊はフリーのカメラマンなので、通勤にしばらくは行けませんから、一応山暮しでもこまらな、と思ったからです。そのかわり、家を増築し、庭に暗室用の一棟を建ててやらねばなりませんでした。

引越してきたとき、この家で最初の一夜をあかして玄關のドアを開けると、眼の前に猿がいました。びっくりしましたが、それ以上に猿は驚いたと見えて、何度かあとをふりかえりながら、林のなかに逃げていきました。

その猿に、八十メートルほどはなれた隣家のご主人が餌をやるうちに、猿はそこにいてしまいました。その庭には、大きな雑種犬がつかれていて、私の足音を聞くとやか

ましくほえたてるのですが、面白いと思ったのは、猿がすっかり仲良しになって、犬の背中に乗って遊んでおり、やかまし屋（？）のその犬がまったく黙認して仲良くしていることでした。仲の悪いことを「犬猿の仲」というが、事実はまったくちがうではないか、と思つたことです。

家から二キロ山裾の方に、故伊藤肇君の紹介で二十四年前に知り合つた岡野喜一郎氏が「小島伝記文学館」というのを建ててくださったので、そこに蔵書を寄付いたしました。しかし私はまだ現役であり、蔵書なしでは仕事が出来ません。そこで山の家をつくつて逗子から越してきたわけですが、毎日そこまで歩いていつて、仕事をすることにしました。

片道三千五百歩、往復七千歩、移る前の逗子の家では一日二百歩に落ちこんでいましたから、ここに来て一日で一月分以上を歩くわけです。これは健康上大いに有効だと思つて内心よろこんだのですが、やがてくたびれ方がひどくなりました。やはり一日二百歩という生活を五年もつづけていたので、足が大いに弱つていたものと思います。仕方がないので、資料が必要のときはバスで行くことにし、仕事は主として家でやることにしました。そして、できるだけ運動不足にならないよう、散歩コースをいくつかつくつたのです。Aコースは千歩です。Bコースは二千歩です。CコースはAコースとBコースと合わせたもので三千歩です。

原則として午前と午後の二回、ステッキをついてこのうちのどれかを歩くことにしまし

た。ところが一昨年の秋頃から体調がくずれ、歩くのが苦痛になってきました。そしてついに今年になって、Aコースを一日一回歩けば大収穫だということまで、落ちこんでしまったのです。

五月一日が満七十歳の誕生日でした。しかも、老年のため五年の期限にもらった家のローンをその月に完済したのです。ホッとしたのは事実ですが、体調は最低となり、翌六月下旬、梅雨の真っ最中に山を降りて、逗子の稲富病院に入院いたしました。それは東京麴町の谷クリニックで、直腸にポリープがあるといわれたので、それを取るついでに、一昨年から悪化している痔の手術をしてもらおうと思ったからです。

ところがそれからが大変でした。直腸の奥を見ようとしても、突起物が妨げて見る事ができない、どうもこれが怪しいということで、横浜警友病院から直腸専門のドクター（石井忠弘医師）が来られ、その一部分をメスで切りとって持っていかれました。そして検査の結果、警友病院に入院して手術を受けることになったのです。

そのとき、突起物が癌だということは明言されず、

「怪しきは罰するということです」

といういい方で、手術する予定を告げられました。しかし私は、（癌だな）と直感しました。それは結果的にはまちがっていなかったのです。

六月二十三日に稲富病院に入院、同二十八日に警友病院に入院、七月十二日に石井医師

の執刀で「直腸癌」の手術——六時間半かかったそうです。八月一日から放射線の照射がはじまり、合計二十五回の照射が完了したのが九月五日、そして十二日に退院しました。

横浜から、この駿河平まで一気にもどるのはつらいので、先ず逗子の次男宅で休養し、十六日この山の家にもどることができたのです。

入院していたのは合計八十二日、その間いろいろのことを思いましたが、非常に切実だったのは、あの散歩コースを自由に歩きたいということでした。ところがそれがなかなかできなかったのです。理由は放射線照射による後遺症Ⅱ被曝症状（火傷）がなかなか治り切らず、歩行に苦痛を感じたからでした。

手術の経過が順調そのものであったのは、石井ドクターのすばらしい手術のおかげだったと感謝にたえません。ただこの照射のあとが大変でした。放射線は、患部の表と裏から、つまりヘソの方向と尻の方向から、合計五分間程度の照射を受けるもので、それ自体は痛くもかゆくもありません。ただ、照射がおわるとぐったりと疲れ、食欲が減退します。人によっては吐くそうですが、私は幸いにして吐くことはありませんでした。

照射は二十五回やることになっていました。次第に回数を重ねると、局部は被曝症状を呈し、火傷がひどくなってきました。その火傷の上をまた照射するわけですから、火傷はさらにひどくなり、タダレてきて、痛みのために熟睡できなくなります。

照射がおわったのが九月五日でした。そのあと一週間休んで退院させてもらったわけで

すが、放射線の火傷は、普通の火傷とちがつてひどいということについての認識に欠けていました。おどろいたことに二カ月たつても治り切らず、歩行困難、すわることも苦痛という状況です。

せっかく自由になったはずなのに、楽しみにしていた散歩もままなりません。勇気をふるいおこし、そろそろとAコースを歩いてみようとしたのですが、半分も行かないうちにあきらめて引き返してしまいました。

そういうわけで九月中はダメ、なんとかAコースを、つまり千歩のコースを歩き抜いたのが十月中旬のことでした。それが精いっぱい、まだ、Bコースに挑むだけの気力はありませんでした。その間に、いちよう並木の葉はしだいに黄ばみはじめ、朝夕の冷えこみがきびしくなつてきて、秋は駆け足で過ぎ去る気配——なんとなく焦りを感じはじめました。

十月もあと三日という日、二十九日の日曜日は朝から快晴で、散歩に出ようとすると、孫たち——四歳の兄佑樹、三歳の妹瞳がついてきたい、といいます。

「おじいちゃん病気だから、ゆっくりと行くんだよ」

と念をおして歩きはじめたのですが、すぐに駆けだしてしまつて、勝手にBコースの方に曲がつてしまったのです。

私も観念して、そのあとをそろそろと追って行きました。無論、途中でへばれば引き返

すつもりだったのですが、孫に引つ張られてとうとうBコースを歩いてしまったのです。

透きとおるような青空をバックに逆光に輝くいちようの葉がじつにきれいで、元氣な孫たちの声だけしか聞えぬ静寂な並木道を歩いていると、いかにも秋を満喫しているような満足感がありました。それも、

「やっとBコースを歩いた！」

というよろこび、それだけ火傷もよくなったのだといううれしさあればこそその満足感だったのです。

横山院長の言葉

部屋にもどり、Bコースを歩いたというよろこびを噛みしめると、

「ああ、有難い！」

と感謝の思いがおのずと胸にあふれてきました。

BコースⅡわずか二千歩——それだけのことに、あまりおおげさすぎはしないか、というお方は、健康に慣れきった幸せなお方だと思えます。たった二千歩でも、歩けないということのつらさ、くやしさは、私自身、健康なときなら想像もできなかったでしょう。病んでみて、永い間自由を拘束されていて、ベッドに寝たままで、気のむくままに歩けるという状態を夢見て、やっとそういう状況に近くなったのに、二カ月近くもそれができなかったあとの実現です。それはまさに、

「蘇生の歓喜！」

とでも名づけていい喜びであり、七十歳にして初めて知ったものでした。

それだけに、その蘇生の原点ともいえるべき病院の情景が、おのずと思いだされてきたのです。

入院して、気持が落ちこまない人はいないでしょう。私は、体調をくずしたのが一昨年の秋で、去年の暮から寝こむ日が多くなりました。それだけ衰弱していたわけで、入院する頃は、その衰弱もかなりのものだったと思われます。

横浜の警友病院では、最初三人部屋でした。狭い部屋で、ベッドを並べていることは不自由な点もありますが、面会人の出入りもあつたりして、気がまぎれます。ともかく、落ちつけない反面、一人きりになって、陰気に病氣のこと、手術の心配などよくよ悩むということは、そのために避けることができたのでした。

入院した翌日レントゲン撮影と血液検査、次の日に心電図がとられ、四日目に個室にうつることができました。

それからの約一週間、エコー、CT、肺活量、バリウムを肛門に挿入しての検査、胃カメラなどの精密検査を受けましたが、これが衰弱した身にはかなりの負担で、その疲れからか気分が次第に落ちこんできました。

またその間に手術後につけることになる人工肛門のビデオを見せられましたが、今後この処置が死ぬまでのお荷物になるかと思うと気持も重くなつて、ますます落ちこんできました。